キキョウが咲く伝統地

今や貴重な風景に

開田の草地

8月お盆すぎ、神戸大学生物多様性研究室が調査する木曽町開田高原の伝統的草地にキキョウが咲く。ススキの穂も伸び出し、フジバカマを除いた秋の七草が咲きそろう。キキョウやナデシコの自生が絶滅を危惧される今日では、全国でも貴重な風景だ。

人の手が入らない放棄地は草原の花がなくなっていく。かつては伝統地だった放棄5年目の調査地では、幾種かの花は咲くが、ススキが人の背丈ほど草丈を伸ばし下層への光を妨げる。イバラや松など木が生え始めている。同大大学院生の永田優子さん(25)は「草刈りも火入れもないため、枯れ草が積み重なり地面に光が届かない。種が芽吹いても成長できず、草の種類が少なくなっていく」とみる。

約8年目の放棄地は春からすでに花が咲かない。草はススキやイタドリが優勢だが、前年から立ち枯れたままのススキの株は自身の成長も弱め、草丈を越えて木が成長し草地から森林へ移り変わる途中だ。

キキョウ、オミナエシ、ススキ…。秋の七草の6種が咲きそろう伝統地

またこの時期は、チャマダラセセリの2期目の発生時期。伝統地では成虫や卵が確認され、NPO法人日本チョウ類保全協会(東京都、会員約600人)など他団体と調査が重なった。同NPOは、昨年から地権者や地元有志に協力し、伝統地近くの放棄地で草を刈る。

同NPOの中村康弘事務局長によると、全国的に激減する多種の草原性のチョウの生息地として、30年ほど前から開田高原が注目を浴びだしたという。5年前に伝統的な隔年の火入れを木曽町などに提言し、昨年、放棄地の草刈りを始めた。低木が生え、野焼きができない場所の森林化を防ぎ、チャマダラセセリの生息環境や産卵地を広げる試みだ。

自らも草を刈る中村事務局長は「開田の草地は先人がつくった文化的景観。伝統的農業の中、長い年月を経て成立し続いてきた豊かな動植物の環境が短期的な変化で消えてゆく。なんとしても残さねば」と話す。

(田澤佳子)

創立30周年記念
功労者らを表彰
建築ブロック工協会

日本建築ブロックエクステリア工事業協会県支部(事務局・松本市野溝東)はこのほど、創立30周年記念表彰式を市内で開いた。県内各地の支部役員を務めてきた永年功労会員12人と、永年優良会員8人にそれぞれ感謝状を贈った。

感謝状を渡される永年功労会員(左)

同支部は7月31日に創立30周年を迎えた。この間、ブロック塀のボランティア診断などのほか、建築ブロックや積みブロックの技能

それらの事業に大きく貢献した会員や、創立時から役員として尽力してきた会員などを対象に表彰した。来年、協会の全国大会が松本市で開かれることから、今年は支部主催の30周年記念式典などの行事は控えた。

同支部は創立当初の会員は約100人だったが、長引く不況などを背景に会員が減り、現在は約30人。小林久幸支部長(74、長野市)は「会員が少なく苦労